

歯科医院の経営

2015 / Winter / VOL.29 / NO.109

優れた歯科医師が勝れた歯科医師になるために ～予防歯科・在宅歯科医療への取り組み～

Main Contents

歯科医院経営研究会からの提言

歯科医院経営研究会 理事 佐藤 正文

5分でわかる

自助努力時代のライフ・デザイン・セミナー

勝ち組に聞く

(29) 成功の法則 岩崎 貢士 先生

<リハビリ病院が臨床のルーツ

歯科は生活を支える医療>

地元密着の継承と夢実現への新たな挑戦

～院長と跡継ぎ副院長・家族全員で次代へつなぐ夢～

第1回 学び多き勤務医時代から「なかむら歯科大改革」のはじまり

取材「予防歯科導入への道」

<前>データが示す予防歯科のニーズと将来性

リハビリ病院が臨床のルーツ

歯科は生活を支える医療



【岩崎 貢士 プロフィール】
 岩崎 貢士／いわさき こうじ
 1970 年生まれ
 1995 年 日本大学歯学部卒業
 1998 年 市川市リハビリテーション病院 歯科 医長
 2005 年 岩崎歯科医院勤務
 2009 年 いわさき歯科に改称 院長就任
 日本顎咬合学会 常任理事

継承の苦勞を乗り越えて

父と私の歯科医療に対するスタンスは大きく異なりますから、当院を引き継ぐにあたってそれなりの苦勞はありました。診療について言えば、私がやりたいと思う治療を患者さんに説明しようとするれば、結果として父の治療を否定することになってしまうこともあるわけです。「父の時代にスタンダードだった治療も、時代の変化とともに変わります」とお話しし、患者さんのこれからの人生を踏まえた歯科治療のあり方をご説明するようにしましたが、結果を出さなければ認められないことは、父から強く指摘されていました。

リフォームにともなう4つのポイント

いわさき歯科では、「摂食嚥下歯科」、「予防歯科」、「入れ歯歯科」、「消毒・滅菌の安心歯科」という4つの独自のポイントを掲げています。その背景にある考え方についてご説明します。

①摂食嚥下歯科への取り組み

近年は摂食嚥下の大切さに対する認識が広がっています。従来は歯を治して噛むことができるまでが歯科医師の役割で、言ってみれば「歯の専門家、に過ぎませんでした。私は歯を治した上で、食物を正しく噛んで飲み込むことによって栄養となり、元気になって笑顔を取り戻すまでが本来の歯科医師の目的だと考えています。ですから、「食べる、を支援する歯科」と表

地域の歯科医療を担って50年

本院は1966年に父が開業しました。私は父が体調を崩したことを契機にこの地に戻り、2007年に跡を継いで8年目になります。

高校生の頃は医師に憧れたこともありましたが、尊敬していた近隣の先生から医師になることを勧められたこともありましたが、当時は人の命を預かるだけの度量に自信が持てませんでした。父や母から歯科医院を継ぐよう言われたことは一度もありませんでしたが、人と接することが好きでしたから父の仕事ぶりを見ていて歯科医師の仕事もいいなと。なんとなく導かれるように、というのが正直なところでした。その後、歯科大学を卒業して臨床の現場に立つようになって約20年。いまは歯科医師になって本当に良かったと思っています。近年は歯科大学の留年者や国試浪人の存在が話題になっているようですが、テニス部の後輩たちには、歯科医師資格をとらなければ意味がないと常々話しています。

現してもよかったと思っています。

歯科医師の立場から食の支援に取り組むことになったきっかけは、市川市リハビリテーション病院（千葉県）で勤務した経験によるところが大きいです。脳血管疾患（脳卒中等）により一命をとりとめた方の摂食嚥下リハビリテーション、口腔ケア、義歯治療を担当した7年間、ひとりで1000人を超える患者さんに携わりました。

当時はまだ介護保険制度が導入される前で、摂食嚥下に目を向ける時代ではありませんでしたが、東京都リハビリテーション病院の植田耕一郎先生（現日本大学歯学部教授・回復期リハビリの専門家として著名）のお導きによって勤務することになったのです。

ターミナルケアや、障害を持った方の社会復帰を支援するための7年間は、歯科医師として何ができるかを考える貴重な機会になりました。口腔内の状態を整えて食べる機能を回復させれば、リハビリの効果も上がり元気になって退院されていく、その様子を目の当たりにしたことが私の診療のルーツになっています。実家に戻ることが決まった時に、リハビリテーションの概念に基づいた歯科医院を展開していこうと考え、「摂食嚥下歯科」を方針に掲げることを決めたのです。

最近ではマスクミなどで摂食嚥下の重要性が取り上げられるようになりましたが、私からすれば、「なぜ今まで注目されなかったのか」と疑問を感じます。食を支



える役割を担うことができるのは歯科以外にあり得ません。医師であっても口の中のことには詳しくありませんし、言語聴覚士の方も噛み合わせや入れ歯の不具合など、口腔の機能や状態まで評価することはできません。形態や機能を正しく評価・治療できる歯科医師が目を向けなければ、食を支える職種はないことになってしまいます。

国民の高齢化が進み、全身疾患の有病者の割合も増えており、削って詰めるだけでは健康を取り戻す事はできない、時代が変わったとも言えるでしょう。長崎リハビリテーション病院の栗原正紀先生は、「命を守る医療は20世紀から行われてきた。しかし、命を取りとめても障害をとめないながら残る生涯を暮らす方が増えている。したがって、これからは生活を支える医療が求められる」と仰っています。

②予防歯科と訪問歯科のあり方

長年にわたって高齢の患者さんを診てきた経験から、口の中の環境を整えた後、その状態を維持させることが重要であることを実感します。予防歯科は、義歯やブリッジにならない、歯周病に罹らないことが主な目的といわれますが、私はしっかり治して守っていくという再発予防という意味での予防歯科が重要だと考えています。

具体的に行うことは、患者さんの状態に応じて1～2ヶ月に1度来院していただき、全身状態の変化、歯周病の進行や炎症の有無、義歯のチェック、PMTC、問題なく食事ができる口腔機能が維持できているか、などについて必要なジャッジをします。特殊な検査器具などは使用せず、クリーニングするほか日常のセルフケアの方法を確認したり、義歯の使用時に不具合はないか、残存歯や食の機能に問題はないか、などを丁寧に確認します。お一人お一人の患者さんと生涯のお付き合いをさせて頂く覚悟ですから、もし入院された時に私が作った入れ歯を外されたりすることが一番残念ですね。

また、患者さんが認知症などの影響によってご自分の健康維持に意識が向かなくなってしまった時、キーになるのは患者さんのご家族です。元気に通院されている時からご家族とともにフォローアップしていれば、脳卒中等を発症して来院できなくなっても、ご家族から連絡を受けて様子を見に伺うこともできます。そのような関係性がないと、もしもの時を境に歯科との関係が途切れてしまいます。仮に在宅療養が必要な状態になっても、変わることなくフォローを続けていくのが、これから求められる歯科医療だと思います。

最近では「訪問歯科を始めよう」というようなダイレクトメールが次々に来ますが、長い間その患者さんを診ていた先生が在宅でも診つづけることが本来の訪問診療のあり方だと思います。通院が可能な方だけを対象としているのでは、これからの時代には合いません。私も訪問診療を行っています。いずれもお元気の頃は通院されていた患者さんです。一生おつき合いです。というのはそういうことだと思います。

③入れ歯から学んだこと

リハビリテーション病院で来院される平均70歳の患者さんたちの主訴を調べたところ、6割が入れ歯に関するトラブルでした。これは当時20代だった私には予想外のこと。今後のことを考えて真剣に義歯の治療に取り組むことを決め、深水皓三先生、上濱正先生が主催する勉強会「PTDC」に一年待ちで入会しました。「PTDC」の義歯に対する考え方の特徴は、単にどうやって吸着させるかというような技術の問題にとどまらず、良質な義歯によってどうやって健康を取り戻すかということまで視野に入れていることです。それは私が求めていたことに見事に合致したものでした。その後も両先生が立ち上げた高度治療義歯研究会に関わり、入れ歯ワールドにどっぷり浸かって現在に至っています。

当時、開業医の間ではインプラント全盛の時代でしたが、私が診ていた方はターミナル期であったり何らかの障害を抱える方ですから、上濱先生から、「最後

の抑えになるのは入れ歯」と教えられたことを実感しました。

脳卒中で入院して手術する際に入れ歯を外し、一命を取りとめたものを入れ歯を戻さないまま何日も過ぎてしまうことが少なくありません。一ヶ月も経てば入れ歯は合わなくなります。リハビリ病院に来られるのはそのような方ばかりです。手術した翌日から入れ歯を入れて欲しいというのが希望ですが、中には不適合な入れ歯もありリスクが伴います。その辺りの正しいジャッジも、入れ歯の重要性に対する認識も薄いのが現状です。

当時は振り返って言えることは、リハビリと治療の技術は両輪であるということです。摂食嚥下の重要性が注目されるのは喜ばしいことですが、同時に正しい口腔の機能を引き出すために形態を整えることが必要です。私はまずその必要性を痛感してから必死になって技術を身に付けましたが、本来ならばまず義歯・補綴の知識と技術をしっかり学んでから摂食嚥下リハビリに取り組むことが理想だと思っています。

いずれにしても「歯を診て人を見ず」とならないよう、常に歯科医師としてひとりの患者さんに何ができるかを考えることが大切です。全身の状態を踏まえて口を診るといった視点が養われたことは今でも財産だと思っています。



やりがいのある職場づくり

目指す医療サービスを実現するには院長の考えを理解する人材が不可欠といえるでしょう。人材の募集については歯科衛生士学校やハローワークなどさまざまな方法を利用しました。求人は当院を引き継いでからの数年間、最も苦労した問題でした。

現在は診療の軸になってくれる歯科衛生士が3名いますが、病院勤務から当地に戻ったときは、すべて父の元で勤務していたスタッフでした。診療方針が異なるためスタッフを一新したいとはいえ、昔からの患者さんとの関係もあります。ベテランのスタッフばかりですから、息子ぐらゐの歳の私に何ができるのか、という気持ちもあるでしょう。新しいやり方に順応するのが嫌う方もいます。そこで性急なやり方は避け、過去の良いところは残しながら少しずつ私の色に変えていこうと気持ちを切り替えました。父の良いところは継承し、昔からの患者さんに安心して通院していただきながら、私の治療方針も加えて新たな患者さんに来ていただくというように…。もちろん時間はかかりました。

その中でまず私の方針を理解してくれるスタッフを1人育て、紆余曲折の末、現在に至っています。現在スタッフは6名ですが、非常に優秀な人材が揃いました。主任を務める歯科衛生士は8年以上勤務しており非常に頼りになる存在です。



この2年ほど、スタッフの入れ替わりがなく、ようやく落ち着いたというところです。

当院には「いわさき歯科職員の十か条」があります(別掲)。優れたリハビリ病院の事例を参考にさせていただいたもので、1人の患者さんのためにあらゆる職種のスタッフがチームとして取り組んでいくことを主旨としており、日常の中で常に確認しあっています。

また、週に一度、反省会ではなく「振り返り」というミーティングを実施しています。1週間の成果や自分が成長できたと思うこと、患者さんからの褒め言葉などを発表し、お互いに承認して全員でシェアするというものです。勤務する中で人間的にも成長していることを実感することが、やりがいに繋がるのではないかと考えて、以前から続けています。

反省会も大事ですが、人は「失敗するな」と言う言葉が逆に失敗を招いてしまうようにも感じます。考え次第ではないでしょうか。

〈いわさき歯科職員の十か条〉

- 1 笑顔を忘れない事
- 2 何よりも患者さんが主役であることを忘れない事
- 3 己を知り人としての修業をする事
- 4 いつでも、どんな時でも優しさを忘れない事
- 5 人の言うことは聴く、考える、伝える事
- 6 他職種に敬意を払う事
- 7 仲間を大切に事
- 8 誇りを持って仕事をする事
- 9 仕事を楽しくする事
- 10 感謝の気持ちを持つ事、そしてそれを伝える事

この理念は、いわさき歯科の歯科医療に対する姿勢です。スタッフにも、この理念を浸透させ、医師・スタッフ一同努力を続けております。なお、この十か条は、長崎リハビリテーション病院のものを参考とさせて頂きました。



お金は使えば戻ってくる

いわさき歯科では26年夏に大幅なリニューアルを行いました。設備の老朽化という理由もありますが、リニューアルを契機に私の診療のあり方を示したいという思いもありました。

具体的には、障害をお持ちの方が何の問題もなく自然に利用していただくことができることを主眼に置きました。ただし、「バリアフリー」とか「ユニバーサル・デザイン」というような言葉で表現することは、あまり好ましいことではないと思っています。大切なことは、昨日まで歩いて通院されていた方が、今日車イスでも変わらず治療を受けられること。それが当たり前であることを、リハビリ病院での経験から痛感しています。「バリアフリー」は自慢することではありません。院内では安全を考慮して、スタッフが落ち着いて車イスの導入・移乗などに対応できるよう常に研修を実施しています。

リニューアルにはかなり費用がかかりましたが、診療で上がった収入は歯科医院と患者さんに還元するものと思っています。「お金は使わなければ入ってこない」と妻にもよく言われます。

人件費も同様で頑張った分だけの適正な評価は必要です。また、給与面だけではなく、働きやすい環境づくりに投資することも、よりよい医療サービスを提供するには必要と考えています。

若い世代へのメッセージ

これから求められるのは歯の専門家ではなく口腔の専門家です。若い先生には食を視野に入れた歯科医師を目指すことをお勧めします。収入には直結しないと思われるかもしれませんが、患者さんに理解していただければ深い信頼関係が生まれ、収入は後から付いてくるはずですよ。

食べる、飲み込むという行為まできちんと診ることができる歯科医師は決して多いとは言えません。口は、「命の入口、心の出口」。入口を整えれば健康な笑顔が生まれます。まもなく患者さんの将来を見据えた歯科治療が求められる時代が来るはずですよ。

